足立区教育委員会指導力向上中核校

渕江小学校　外国語活動・外国語研究通信

第３号
令和４年９月

今年度第3回目となる外国語活動・外国語の研究授業を 石井 伸樹 教諭が行いました。新型コロナウィルス感染症対策のため体育館で行いました。協議会では、中間指導や児童理解について活発な意見交流を行いました。指導・講評では、文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成
～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：5年Ｉ組 担任 石井 伸樹 教諭
単元名：Unit 4　He can bake bread well. 新しく渕江小学校に来た先生のクイズを作ろう
指導講評：文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生より

Hello. I'm Kensuke Okuda.
I can do *Karate*.
I like muscle training.
I can't dance. See you.

〈研究経過報告〉

単元目標である「第三者のできることやできないことについて、具体的な情報を聞き取ったり、話したりする」を達成するために３つのことを重点的に取り組んできた。

①評価の工夫

振り返りカードを毎時間確認し、めあてに正対した振り返りを行うことができたか確認しながら授業を進めていった。また、自己評価の低い児童やめあてに正対していない振り返りを書いている児童には、声掛けを行い、児童の意欲や意識を高めてきた。

②目的・場面・状況等を明確にした言語活動の工夫

単元の始めにエンドプロダクトを提示し、そのためにどんな力を身につければよいかを児童が見通しをもてるようにした。単元の最後には、「先生紹介カード」をもとに先生クイズを作り、6年生に発表するといった活動を行うことを伝えることで、そのために必要な表現を繰り返し話したり聞いたりすることができるよう活動の工夫を行った。加えて、単元の前半では、導入の際に教師が撮影した先生クイズの動画を見せることで、最終活動のイメージをより明確にした。中間指導では、児童が言いたい表現を全体で共有し、話し合う時間を設けた。また、インタビューをする活動では、"Can you cook?"のような、動作だけを問う表現にとどめるのではなく、児童の実態に応じて"Can you cook curry and rice?"など目的語の部分に自由度をもたせ、工夫できることに気づかせるようにした。

③表現を繰り返し使うための工夫

本学年の児童は、第4学年において Let's try 2 Unit 3 I like Mondays. や Unit 4 What time is it? の学習で、"Do you like ～?"や"What do you like?"などの簡単な英語表現のやり取りに慣れ親しんでいる。そのため、児童は、進級後の現在も積極的に既習事項を使ったやり取りを続けようとしている。本単元でも、スモールトークで既習表現を繰り返し使い、定着を図った。また、授業の導入に「渕江小学校の先生クイズ」を実施することで、can を使った表現に慣れ親しみ、児童が自ら表現を繰り返し使おうとする意欲が高まった。

〈授業者自評〉

・子供たちは緊張していたが頑張っていた。
・"Can you cook? Yes I can. No I can't."だけでは、自由度がないので、どうすればくわしく言うことができるのか相当考えた。
・ワークシートは、swim や sing など何ができるのか付け加えられるような動詞を選んだ。

〈研究協議会〉

研究の視点について

視点１「先生クイズ」を聞き取る活動は、児童の英語を聞き取ろうとする意欲を高めることができていたか。また、単元のゴールを示す上で有効だったか。

・奥田先生が出てきたときに子供たちは、集中して動画を見ていた。奥田先生は、ジェスチャーを付けて話していてよかった。

⇒直山先生　「先生クイズ」の動画には、子供たちのインタビューのバリエーションを増やす内容がなかった。空手・マッスルトレーニング・ダンスをもっと詳しくするものが散りばめられていない。どんなマッスルトレーニングができるのかなどが動画に入っていないのに、子供たちが考えて言うのは難しい。どんなふうに工夫したらよいのか、児童が考えられるような内容にする。

視点２　中間指導は、児童がさらに意欲的にやり取りを行う上で効果的な内容であったか。

・子どもたちの発言のレベルが高いと感じた。

・色々なグループを見ていたが、表現を使えている児童と使えていない児童が半々ずつだった。中間指導をしていく度に、インタビューの時間を少しずつ増やしていくと、思考や工夫ができる児童が増えるのではないか。

・“No, I can't.”の後は、普通は“No, I can't, but I can swim.”のようにできることを言うのではないか。これは、中間指導で扱うことができればよかったのではないか。

⇒直山先生　小学校の学習指導要領には接続詞の指導は含まれていないが、“No I can't.”のみでは、短文になってしまうので、”but”を入れて“No, I can't, but I can swim.”のように伝えるのはどうだろうか。学習指導要領上指導する必要はないが、学習指導要領は歯止めを規定しているわけではないので、指導してもよい。

質問　中間指導の時の“so so”が出てきた場面で、できるけど少しできるというのはどう言えばよいかという質問に児童が“I can swim so so”でいいと思うと言っていた。児童たちが気になっているのに、次回に持ち越したのはどうしてか。

⇒この後の単元で取り上げようと思った。この表現を可としてよいのか判断がすぐにできなかった。

⇒直山先生　これは、惜しい場面で、不確かなまま進めずにその表現をもっと追求していくべきだった。アドバイザーが授業の最初にホワイトボードのワークシートを指差して指導していた際には、”I can ～ well.”と言えていた児童もいたので、その表現を使ってもよかった。また、”I can swim a little”とジェスチャーをつけてもよい。指導するだけではなく、指導しきることが大切。

質問　中間指導は、3回に分けられていた。2回目までは、「“Can you ～?”以外に何を聞いたか」や「どんな料理を作れるか」のようによい表現のブラッシュアップをしていた。3回目は、どういう表現が出てきたのかなどまとめのような感じだったが、どういう意図があったのか。

⇒最後の中間指導は、全体共有も兼ねていたので、次時以降につながればよかったと思った。

その他

・ワークシートを考えて作ったということであったが、自分が見たペアは、機械的に同じ回答を連呼しているように見えた。5つの質問から3つ選んで質問するなど児童たちが思考する場面を追加してはどうか。

⇒書けない・聞けないなどの能力差があり、場面緘黙の児童もいたので、全員が5回聞けるのがよいと感じた。中だるみのない1分間でちょうどよいと感じた。

⇒直山先生　最初、どうして動詞が５つなのかと思ったが、後ろに目的語を付けると詳しくなる動詞をしっかり先生は選んでいた。特に“draw”を選ぶことは珍しい。ただ、“Can you cook?”の場合、普通は、目的語を追加するが、このワークシートには、それがなかった。この教材から何を考え、児童の気持ちがどう動くのかを想像し、どんな準備が必要なのか考えていくことが大事である。今回は、5つの動詞(cook, swim, dance, play, draw)以外に出てきたときも考え、絵カードの準備ができているとよかった。そうすれば、他の児童と共有でき、表現が身についていく。

〈指導・講評：文部科学省初等中等教育局視学官　直山　木綿子　先生〉

児童理解

・担任は、児童理解をよくしており、分析的な中間指導を行っていた。

・児童は、よく鍛えられていた。質問されたときに、“Yes, I can. I can ～. ”まで言うことができている児童もいた。

・渕江小学校の児童は、他の学校に比べて、やり取りが続く児童が多い。しかし、正確さという点では、課題がある。教師が正しく言い直して、おさえていくことも大切にしてほしい。

・児童の特性やクラスの特徴をしっかり理解して仕掛けを設定することが重要である。

中間指導

・中間指導前に、児童の様子をしっかり観察し、取り組むことが必要。

・中間指導を行うにあたって、児童がどう反応するかを予想し、あらかじめ準備しておくことが大切。動詞や目的語のカードを用意しておくなどが必要。